

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520361

研究課題名(和文) グローバル時代における日独文学の<対話>研究

研究課題名(英文) The Study of the Dialogues between Japanese and German Literature in the Global Age

研究代表者

依岡 隆児 (Yorioka, Ryuji)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授

研究者番号：90230846

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本とドイツの文学の、戦争をめぐる議論・対話に着目して、新しいグローバル社会に即した両国の文学の役割を考察することを目的としていた。戦後70年を迎えた現在、こうした研究は、意味のあるものであると考えた。

本研究では、ギュンター・グラスや大岡昇平ら日本とドイツの作家の間で展開された「対話」をはじめ、第二次世界大戦から現在、およびその前にまで視野を広げ、日独の戦争にまつわる「対話」を、文学の側面から調査・考察していった。こうした考察の成果は、大学紀要論文や文芸雑誌に発表するほか、報告書としてこの期間に発表した論文や本の一節をまとめることで、社会的にも周知するよう努めた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to consider the roles of the literature in Japan and Germany in the present age. In this study I have researched about the discussions and dialogues on the war, that were held between Japanese and German literature between the two world wars and after the Second World War until now. I have payed attention mainly to the dialogues between Japanese and German writers, for example, Guenter Grass and Kenzaburo Oe or Makoto Oda.

I take this concept for important in this global age or in the present day, when it has passed after the war 70 years, because the memories of the war become gradually forgotten, but nevertheless the both countries should retain those memories and take the alternative leadership for the current crisis situation. I have already published the results of those researches in the proceedings of my university, the other academic journals, the literary magazine and so on.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：国際情報交換(ドイツ) 日独文化交流 ドイツ文学 戦争

1. 研究開始当初の背景

現代社会は原発事故や民族紛争・テロといった深刻な事態を迎えている。こうした現象はもはや一国の範囲で解決する問題ではない。このようなグローバル化する現代において、第二次世界大戦で敗戦国となった日本とドイツは、危機に直面するたびに対話を繰り返し、戦争/平和について議論を深めてきた。たとえば、ヴァイツゼッカー大統領の戦争責任の演説は日独両国で大きな反響を呼び、戦争責任について新たな論議を呼んだことは周知のことである。

だが、両国におけるこのような〈対話〉は、文学の面ではいまだ十分に整理されていない。検証されることなく、様々な立場から恣意的に利用されてきた。また、ともすれば両国は似ているとされ、相手国の議論をそのまま自国にあてはめてしまう傾向もあった。だが、文学におけるこうした〈対話〉は、表層的に政治や社会にそのまま移してしまえるものではなく、過去について多面的にアクチュアルな見方を提示しては問題を深めていくという相互作用的作業である。本研究が〈対話〉という点を重視するのは、そうした現代の安易な風潮に対して、基礎的研究として、簡単に答えの出ない問題を双方向的に検証したいがためであった。

具体的には冷戦下での戦争責任の曖昧化や対米関係、80年代の歴史修正主義論争における両国の類似性ととも、加害者/被害者問題や反核運動との関わりにおける違いを検討する。ここでいう〈対話〉とは、作家・文学者同士によって実際になされた対話・シンポジウム、往復書簡、本・雑誌の共同編集を指す。また戦争関連の文学が相手国に議論を引き起こしたケースも含む。

研究のきっかけは、ギュンター・グラスの研究者で、その翻訳もしてきた筆者が、戦争の想起の問題をひとつのテーマとして

きたが、そうしたなかでグラスと日本人作家とのたび重なる〈対話〉に注意を引かれたことである。グラスと小田実との関係は、大江健三郎との関係に比べ、あまり知られていないが、より緊張をはらんでおり興味深い。反核・平和運動など両者の共通点は多々あるのに、微妙に異なる。こうした日独の作家同士の〈対話〉について、両国の歴史認識や作家の社会的役割の違いも含めて考察する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、日本とドイツの文学の、戦争をめぐる議論・対話を調査し、戦後70年を迎えつつある今、新しいグローバル社会に即した両国文学の役割を考察するものである。

両国は第二次世界大戦でともに敗戦国になり、戦争責任を担ってきた。その一方で両国は敗戦国でなくては見えない批判的視点も育んできた。ただ冷戦後の経済主導のグローバル化の流れの中で、そうした両国文学の存在意義は見えにくくなっている。

そこで本研究では、戦争の記憶が風化しつつあるなか、両国の戦争をめぐる文学の〈対話〉に着目して、その成果をグローバルな視点で検証しながら国境を越えた文学の連携・協働の可能性を探っていくことを目的とする。

3. 研究の方法

「グローバル時代における日独文学の〈対話〉研究」という研究題目で、戦争にまつわるテーマでの対話を中心に研究する。その際、

- (1) 日本とドイツの作家の間で実際に行われた〈対話〉の研究
- (2) 両国における相手国の戦争に関連する話題となった文学作品の受容研究

(3) 戦後 70 周年を記念しての「グローバル時代における戦争をめぐる日独文学の〈対話〉」という論文集の刊行

という 3 点に分けて研究を進める。こうした学際性・国際性の構築のために、本研究においては積極的に出張を行うこととした。

まず(1)の「日本とドイツの作家の間で実際に行われた〈対話〉の研究」としては、戦後のドイツと日本の作家たちの戦争責任をめぐる対談・討論・シンポジウムについて調査し、戦争責任の議論を日独で比較検証し、その相互影響関係を明らかにする。テーマとしては戦争責任、加害者性/被害者性、歴史修正主義、反核運動などを考えていた。

調査方法としては、国内の図書館、日独交流団体で必要な文献の収集にあたる。こうした情報整備は、ドイツ語圏で日本研究の基礎的データとなるばかりでなく、より多彩な日本研究の推進を可能にする。さらに、ドイツへ出張し、現地における日独文化交流関係の資料の発掘・調査を行う。ベルリン日独センターやフンボルト大学、州立図書館、ギュンター・グラス記念館を訪問し、関係者や研究者と交流を深める。

続いて、上記(2)の「両国における相手国の戦争に関連する話題となった文学作品の受容研究」に着手する。まずドイツ語圏における日本の戦争にまつわる文学作品の受容と、日本におけるドイツ語圏の戦争にまつわる文学作品の受容を調査し、整理・分析する。当該文学作品の翻訳についての相手国における書評や紹介を、新聞・雑誌、専門雑誌などで調べる。

最終的には、こうした 4 年間の成果を、上記(3)にあるように、研究論文集としてまとめ、刊行する。

4. 研究成果

本研究では平成 24 年度にギュンター・グラスや大岡昇平ら、日本とドイツの作家たちの中で展開された「対話」を中心に研究し、それを受けて平成 25 年度にはさらに時代をさかのぼり、第二次世界大戦、およびその前まで視野を広げ、日独の戦争にまつわる「対話」を文学の側面から調査・考察していった。平成 26 年度には引き続き、第二次世界大戦における日独の政治的接近に対して、それぞれの国の作家たちが文学・文化の面でとった態度などを、当時の雑誌や、翻訳刊行された相手国の文学作品を渉猟して、整理していくとともに、戦後の日独文学者の間での〈対話〉について資料調査し、論文として発表していった。そして、平成 27 年度には、ギュンター・グラスと小田実との関係を中心に考察し、大学紀要論文としてまとめた。

こうした研究を通して、戦前・戦中の日独文学交流が一方で教養主義的になりすぎたかと思うと、他方で政治的になりすぎたのに対して、戦後は日本とドイツの文学者たちはその敗戦からくる責任を自覚し、グローバル化を迎えた現代世界に対して、対話を通した民主主義の実現と南北格差の是正、反核・平和運動の推進を行う、さまざまな試みがなされてきたことを、論文などで明らかにできた。

また研究期間に、ギュンター・グラスが亡くなるという事態を受けて、筆者は日本におけるギュンター・グラス研究者として、紹介・追悼の記事の依頼を受けて書き、あらためてグラスの日本における存在の意義を広く伝えることができた。さらに、筆者はその後、ギュンター・グラス記念館に訪問し、こうした日本でのグラスの報道等について報告した。

最終的には、報告書を別途作成して、この期間に発表した論文や本の一節をまとめ、社会に広く周知するよう努めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔**雑誌論文**〕(計 7件)

依岡 隆児:

日独文学の<対話>~ギュンター・グラスと小田実との関係を中心に~, *言語文化研究*, Vol.23, 43~61頁, 2015年. 査読無し

依岡 隆児:

「杵淵博樹著『人類は原子力で滅亡した~ギュンター・グラスと『女ねずみ』』, *ドイツ文学 : Neue Beitrage zur Germanistik*, Vol.12/2, No.148, 321~323頁, 2014年3月. 査読有り

依岡 隆児:

片山敏彦の郷愁~戦時下における文学者に関する考察~, *言語文化研究*, Vol.22, 73~93頁, 2014年. 査読無し

依岡 隆児:

Japanisch-Deutsche Literarische Gespraechе zwischen Grass und Oe, *言語文化研究*, Vol.21, 57~68頁, 2013年. 査読無し

依岡 隆児:

旧制高校から見た青春概念の形成, *国際日本文化研究センター*, 327~342頁, 2013年. 査読無し

依岡 隆児:

戦争文学における日独比較~戦争はなぜ語り直されるのか ---, *関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ10「戦争の記録と表象 日本・アジア・ヨーロッパ」*, No.10, 33~39頁, 2013年. 査読無し

依岡 隆児: 核の時代のギュンター・グ

ラス~日独文学の<対話>研究, *徳島大学総合科学部言語文化研究*, Vol.20, 107~116頁, 2012年. 査読無し

〔**学会発表**〕(計 4件)

依岡 隆児:

近代日本における郷土(ハイマート)概念の受容とその変容, *日本比較文学会第76回全国大会*, 成城大学(東京都世田谷区), 2014年6月14日.

依岡 隆児:

旧制高校から見た青春概念の形成, *国際研究集会「東アジアにおける知的交流~キイコンCEPTの再検討」*, *国際日本文化研究センター*(京都府京都市), 2012年11月16日.

依岡 隆児:

戦争文学の日独比較~戦争はなぜ語りなおされるのか ---, *国際シンポジウム「戦争の記録と表象 日本・アジア・ヨーロッパ」*, 関西大学(大阪府大阪市), 2012年9月22日.

依岡 隆児:

旧制高校にみる青春, *シンポジウム「旧制高校をめぐって~中村真一郎『青春日記』を中心に」*, *国際日本文化研究センター*(京都府京都市), 2012年9月15日.

〔**図書**〕(計 2件)

依岡 隆児:

四国グローバル~日本とドイツの文化交流から~, *リーブル出版*, 高知, 2015年3月. 総頁数169

依岡 隆児:

ギュンター・グラス~「渦中」の文学者, *集英社*, 東京, 2013年1月. 総頁数216

6. 研究組織

(1)研究代表者

依岡 隆児 (Yorioka, Ryuji)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授

研究者番号: 90230846